

伊勢のごせんぐう



昔の一枚

平成初め頃の伊勢おおまつり「初穂曳」
※令和三年「初穂曳50回記念」に伴い、昔の初穂曳の写真・映像を募集しています。
(詳しくは中面をご覧ください)

令和二年十月十五日・十六日・十七日 かんなめさい 神嘗祭 奉祝によせて

今年新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、多くの行事が中止となり、伊勢のまちでも恒例の賑やかな「伊勢まつり」「初穂曳」も例年のように開催できず、少しさみしい秋となりました。

伊勢の神嘗月に、今こそ感謝と祈り

そのコロナ禍の中でも、神宮のお祭りは粛々と行われます。10月15日から17日は神宮の「神嘗祭」。年間1500回に及ぶ神宮のお祭りの中で、最も重要なお祭りです。その

奉祝行事「伊勢おおまつり」のはじまり

神宮の神嘗祭、当日は全国の神社で、そして皇居の宮中でも祭祀が行われ、神話の時代より稲作を中心に国を造ってきた日本古来の文化を伝え続けています。

神嘗祭の日は、明治6年に法律で祭日と定められたほど日本の重要なお祭りとなっていました。明治28年には伊勢のまち、当時の宇治山田町で「伊勢おおまつり」として神宮の神嘗祭を奉祝する大きな祭りがはじまりました。記録によると、伊勢の人々は地域ごとに神嘗祭を祝う会式を行っていました。それをまちな全体の祭りとしてまとめ「おおまつり」となりました。宮川や五十鈴川で花火が上がり、お囃子をのせた花車が出て…など華やかな催しが市中で開催されたということです。

戦後、昭和23年に新しい法律で

の年に収穫された新穀を天照大神に捧げて、恵みに感謝し、安寧を祈ります。

この秋の神嘗祭奉祝は、個々で神宮へ足を運び、恵みに感謝することと併せて、この事態の早期終息を祈りたいものです。

祭日ではなくなりましたが、伊勢では変わらず、まちを挙げての大祭として会社や学校も休日でした。時代が移り、神宮の神嘗祭というお祭りの名前までは知らなくても、伊勢音頭、たぐさんの屋台、花車、自衛隊や仮装パレード、鼓笛隊：「おおまつり」は市民にとって一年で一番伊勢のまちが賑わう催事として定着したのです。

その後時世の流れにより「おおまつり」は土日開催に移行、市民祭りとして平成21年より「伊勢まつり」と改称。一時期は開催時期が9月になることもありましたが、近年は元々の神嘗祭奉祝の起源に近づけて10月15日直前の土日に開催されています。

神嘗祭を奉祝する伊勢の大切なお祭り。途絶えさせないよう今年もお初穂奉納行事を執り行います。

伊勢のごせんぐう

お木曳、そして御遷宮を目標に

20年という伊勢の周期

全国から人々が伊勢参宮に訪れるようになった江戸時代。やはり式年遷宮になると参拝者数が増え、伊勢は大いに賑わったといわれています。昔も今も、神宮とともにある伊勢のまち、町衆にとつて式年遷宮は人生の節目、まちづくりを考えるときに外すことのできない20年の周期です。

災害や災禍、時代の流れのなかで、無事に20年ごとの御遷宮を迎

えられることを祈り、その時を指して次世代に伝え、準備を整えていくことは伊勢の人々には不可避といえるでしょう。

令和2年、まだ先のようにですが、御遷宮諸祭行事の始まりは5年後。早ければ来年にはお木曳の準備が動き出す地区もあります。次の御遷宮まで、自分が、また子どもたちが幾つでどのように携わるのか、下記年表をご参考に伊勢の民俗行事についてご家族で話題にしていだければと思います。



第62回御遷宮諸行事 御樋代木奉曳式・陸曳／平成17年
／子ども・女性・町衆の3台奉曳を行いました

みひしろぎほうえい ■キーワード 御樋代木奉曳式

お木曳行事の前年春より、御遷宮諸行事として木曾の御山から御用材のお祭りがはじまり、最初に伐採されるのが「御樋代木」。御樋代とは御神体を納めるための御器のことで、そのための特別なご用材ということです。木曾を出発し、道中各地の人々に歓迎されながら伊勢へと大切に運ばれてきます。内宮・外宮でそれぞれ最初の奉曳行事が行われますが、古式に則ったやり方で神域へ曳き込むところがお木曳との違いです。

年度	令和 2 年	令和 3 年	令和 4 年	令和 5 年	令和 6 年	令和 7 年	令和 8 年	令和 9 年	令和 10 年	令和 11 年	令和 12 年	令和 13 年	令和 14 年	令和 15 年																						
西暦	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033																						
行事 予定	今年 の 年 齢	第 50 回 初穂曳		お木曳 行事準備 ※連合会 結成等		御樋代木 奉曳式 浜参宮 試し曳等	第一次 お木曳 行事	第二次 お木曳 行事			お白石持 行事準備 ※連合会 結成等			お白石持 行事																						
神宮の 御遷宮 諸祭															山口祭～ 御杣始祭	木造始祭		鎮地祭	宇治橋 渡始式		立柱祭 上棟祭 など	【遷宮年】 遷御														
少年 年齢層																							6～12 歳	7～13	8～14	9～15	10～16	11～17	12～18	13～19	14～20	15～21	16～22	17～23	18～24	19～25
青年 年齢層																							13～44 歳	14～45	15～46	16～47	17～48	18～49	19～50	20～51	21～52	22～53	23～54	24～55	25～56	26～57
壮年 年齢層																							45～64 歳	46～65	47～66	48～67	49～68	50～69	51～70	52～71	53～72	54～73	55～74	56～75	57～76	58～77
老年 年齢層	65 歳～	66～	67～	68～	69～	70～	71～	72～	73～	74～	75～	76～	77～	78～																						

※一連の行事開催年は前例を反映した予定です。社会情勢等により変動する場合があります。

●ごせんぐう千三百年の歴史から 途絶えた御遷宮と 織田信長

百年余りの間、式年遷宮が途絶えていた時代がありました。

時は戦国。第40回内宮御遷宮のあと、室町幕府の力がなくなり役夫工米でまかなわれていた御遷宮の実施が財政的に難しくなつたのです。百年を越えて、途絶え荒廃するご正殿を憂い、立ち上がったのは伊勢の尼僧、慶光院清順上人。全国を勧進行脚し寄付を集め、念願の外宮の御遷宮を再興したことが今に伝えられています。

その時代、戦国を収め、天下人となつたのが織田信長。神宮は、式年遷宮を再び途絶えさせることのないよう、信長に次の御遷宮費用の一部である二千貫を仰いだところ、信長は三千貫を奉獻。さらに不足分も応じると約束(『信長公記』より)。しかし、信長は御遷宮に先立つ天正10年、本能寺の変にて急逝。信長の御遷宮資金とともに豊臣秀吉も寄進することとなり、天正13年、第41回式年遷宮は無事遂行されました。以降も、信長・秀吉の遺志を継承し徳川家康が幕府の管轄として造営資金を献進することとしたため、長く続いた江戸時代も式年遷宮は途絶えることなく、続けられたのです。